高宮先生の思い出

飯田修一（物理）

高宮先生がお亡くなりになったという悲報に接してからもう既に1ヶ月以上になる。私は高宮先生とは二つの意味で接触があった。一つは私の弟子の田崎明君（阪大基礎工学助教授）を介してであって，米国に永住しておられる両親が，田崎明君の日本での親代りとして依頼されたのが高宮先生なのである。今一つは大学紛争を通じてであって，理学部での学生諸君の抗議活動が最も華やかであった時に，丁度高宮先生，秋田先生等と共に理学部学生委員として，学生諸君との接渉に当ることになったのである。不思議なもので今思い出すと苦しかった記憶は薄れて，嬉しかったことや，高宮先生の御人格に触れて感銘を受けたこと等だけが思い起される。高宮先生が学生諸君を前にして交渉に臨まれるときの意気込みはそれこそ大変なものであって，どんなに永く掛っても説得するという心情に満ち満ちて居られた。その結果交渉は必ず深夜にまで及ぶが，妥結点は常に大変合理的なものであった。高宮先生は大変お酒ずきであって，私が酒も煙草も飲まないというと，「それでは何を楽しみに生きて居られますかね」と問われて参った事がある。理学部と学生諸君のためにほんとうに身命を削る努力をされた結果，とうとう病院に入院されることになったのであるが，その際，「一緒に入院しませんか」と真面目に誘われた。私が冗談に，「入院も結構ですが，高宮先生と同室では」とかお答えすると，「ありゃ，あんなことを言って」といたづらっぽそうな顔で眺められたことが今更のように眼に浮ぶ。私は心身共見掛けよりは少々丈夫に出来ているようで，その結果時々得をすることがある。高宮先生のお話によると先生は私が弱そうであるからということで，学生委員としての活動中，ずっと私をかばって下さって居たということであって，案外私が参らないということを発見されたとき，先生の身体の方が，言う事を聞かなくなって居られたという次第のようであった。その時の恩情に溢れる，しかし残念そうな高宮先生のお顔は一生忘れない思い出である。

高宮先生と最後にお会いしたのは理学部4号館の廊下の中であって，もう既に退官された高宮先生が，ベレー帽を頭に凱々として歩いて居られた。突然のこと等でびっくりして御挨拶申し上げた後，私は物理学者として，色々なことは譲れるけれども，こと物理学の真理に関する限りどうしても譲れないといった最近の気持ちをお話しすると，大きくうなづかれて居られた。この姿が，私の脳裏に残る高宮先生の最後の姿になろうとは，その時全く想像出来なかった事であった。主義・主張は人それぞれ千差万別であろうが，人間として頼れる人を一生の中に何人か見出すことが出来る人は，幸福と云えるのではなかろうか。私は自分の分野の中で，恩師茅誠司先生を初め何人もの心から信頼できる先輩を持って居るものと信じているが，高宮先生は他の分野の中で見出した数少い信頼できる先輩の最たる人である。今こゝに高宮先生の思い出を書かねばならないことは何とも言いようのない程残念なことである。

ここに先生の御冥福を心から御祈りする。